

板倉鼎・須美子夫妻の留学生活

—『板倉鼎・須美子書簡集』、「昇須美子遺稿(病床日記)」より抜粋—

(1) ホノルルの生活(1926年)

書簡集 p37 書簡 no.29 3月1日付け、須美子より両親宛て

左に書いてありますのは私達の家のお面でございます。

少し広すぎますがこれからお客様がいらして画をごらんになったりあらゆる人が来ますから相当の家と思ひます。

一月に家代 55 \$、ガス、デンキ、デンワで 15 \$ 後は会費其他のみつもりです。

家計簿も毎日つけて居りますから時々うつつてお送りします。ではお元気好くお生活のことい
のります。

(2) パリで学ぶ喜び(1926年)

書簡集 p159 書簡 no.89 8月25日付け、須美子より両親宛て

巴里はほんとに、芸術家の天国の様に、

画についての何物も、たやすく、得る事が出来、

他でみられない物を見る事が出来ます。

ほんとに、私達は感謝して居ります。

ほんとに、一生懸命、見てもみつけないこの芸術を、

なるべく、多く、見、自分の勉強を高める

心が起つてまゐります。その代り、又、一方、自分は、

バカで小さくてしようがない気が致します、

(3) 鼎、新しいスタイルを確立(1927年)

書簡集 p319 書簡 no.146 7月8日付け、鼎より両親宛て

今度同じものを二度つけて書きました静物に置いて、少くとも自分では昔の自分の型を見
出す事が出来ません。今は唯それだけで喜んで居ります。明日の日への真夜中に立ったわ
けです。第二年目は新しいものゝ発見に全力を注ぐつもりで居ります。

(4) 須美子、油絵を始める(1927年)

書簡集 p375 書簡 no.170 9月6日付け、鼎より両親宛て

スミ子にも油絵をはじめさせました処、大変工合よく進むで居ります。それに日常も無駄な時
がなく、大変よい工合です。なまじ日本で教育を受けてないだけ洗ひ落す何もなくてのびくと
のびて行きます。私の考へではよささうです。本人ものり気で一処懸命幸ひ室が二つありま

すのですべて私ののこりものを使ってやって居ります。

(5) 鼎、金魚を描く(1927年)

書簡集 p425 書簡 no.190 11月16日付け、須美子より両親宛て

昨日から鼎さん、金魚の静物を始めております。前から金魚が描きたいと申しておりましたが売って居る店が見つかりませんので断念致して居りました処セーヌ河岸にやつとみつけて買ってまゐりました。多分日本から来ましたのでせう。二人きりのところへ金魚がたつた五匹ばかりふえましたのですけれど大部淋しさがうすらぎます。

(6) 長女カズの誕生(1927年)

書簡集 p465 書簡 no.205 1928年1月27日付け、須美子より両親宛て

鼎さんは此頃赤チャンが寝て居りますとそばをはなれません。寝てみると可愛いなあ、だけど泣くときの顔はタコのごめんだといつも申しては笑つてしまひます。(中略)泣きますとこのベッドがギイギイなります。

(7) 板倉夫妻と藤田嗣治(1929年)

書簡集 p695 書簡 no.316 1929年4月10日付け、鼎より母宛て

例の今度の日本人の展覧会でスミ子が大変な評ばんで藤田さんなども人を前につれてつてはほめてたさうです。そしてアンドレ、サルモンと云ふ有名な批評家が今度評を書いたのですが私のが唯一行なのに比して六行も書いてあります。それに今日行って見て居りました処立ちどまらない人はありません。本人は見に行かれないので帰つて来て話して二人して喜んでいます。

(8) カズの成長(1929年)

書簡集 p712 書簡 no.323 1929年4月26日付け、須美子より両親宛て

一坊は益々太つて元気になつてまゐります。(中略)朝起きますと先づクツをはかせると申しまして自分で足の先へつけて待つて居ります。はかしてしまひますと私の手を引っぱってどどんヨッチヨッチヨと云ひながら台所の方のドアへ歩るいてゆきまして私の手をパツとはなして一人で立つて居ります。そして開いてやりますとまた台所の窓の方へ歩るきまして、そこから道を通る人をながめるのでございます。一坊の顔が出ますと向側の糸工場の女工さん、下のタイピスト達が一せいに手をふりふりボンジュールボンジュールと云ひますと一坊はお得意になつて同じ様に手をふつて色々日本語ともフランス語ともつかぬ言葉で話して皆を笑はせて居ります。Dutot の通りで一坊を知らない人はほとんどございませぬ。

(9) 鼎の死と《休む赤衣の女》(1929年)

書簡集 p803 書簡 no.368 1931年7月5日付け、須美子より両親、弘子宛て

此の秋の展覧会へは八十号の休む赤衣の女を御出品の由うかがひましたが、全くあの画は他の人々にとつてはたゞ画面から来る感じだけで御座いますが私には強い想出が御座います。二人共たゞく サロン・チュイルリーのことをたのしみに夢中で出来上つたものでしてずいぶん苦しみがともなひました。寒い冬、うすい服でお腹にはフミ子の動きを感じながら、あのポーズで、そばのカズ子を口と目で守しながらモデルを幾日かすごしました。見る人は海辺のほがらかさを感じることで御座いませうが。

今更ながら過去の事々を考へ、たゞ夢中が今日までどうやら私をこゝまで連れてまゐつたのだとしか考へられませんが。悲しみも淋しさも乗り越した何と申し様ない感情で一つぱいで御座います。さだめし皆様も堪へがたくみらつしやいませうとお察し申し上げます。

(10)須美子の死(1934年)

昇須美子「病床日記」1934年1月10日

パリーの岡様よりお便り。十日がかりでお忙がしい中をお書き下され、色々御注意と御指導とお励ましの御言葉を頂き、心の中に火の玉を入れたやうに感動し、有難く思った。(中略)ドクトーの店屋の亭主やおかみさん達やコンシェルジュのぢいさんばあさんは相変らず噂話に花を咲かせて時を過してゐるだらう。マダム・テッパスは銀行へ通つてゐるかしら。上の未亡人の、ピッコの美しいマドマゼルはどうなつたことか。そのうちにあのアパルトマンの庭のリラの花が美しい事だらう。板倉と一ちゃんと、あの庭でよくまり投げしたつけ……秋にはダリアと菩提樹の黄色い葉が何とも言へなかつた。